

セルゲイ・プロコフィエフ(1891-1953)といえば、そのモダンな作風から、彼以前のロシア人作曲家とは大きな違いを感じるだろう。また「ロシア」というより、ショスタコーヴィチと並ぶ「ソ連」を代表する作曲家という印象が強いかもしれない。

《束の間の幻影》は、20 代半ばのプロコフィエフが書いたピアノ小品集。タイトルにある通り「束の間」に過ぎていくような、数十秒から2 分程度の小曲で綴られている。第1 曲「レントメンテ」はゆっくりと歩む和音と旋律の中から、あたかもドビュッシーのような幻想性が立ち現れる。

祖国の革命や世界大戦でいったん亡命したプロコフィエフは、1930 年代半ば、ソ連邦に帰還する。それとともに、響きそのものはモダンでありつつも、より平明で叙情的な作風へと傾斜していった。そうした流れのなか、古典風のバレエ音楽として世に問うたのが、ペローの童話に材を得た《シンデレラ》である。完成は1944 年で、翌45 年にボリショイ劇場で初演され、チャイコフスキーに献呈された。「舞踏会に出かけるシンデレラ」は、全曲を貫く「愛の主題」に続いて、舞踏会をイメージする様子が描かれ、「シンデレラの踊り」へと至る。その後、舞踏会で夢見心地なひと時を過ごしたシンデレラだが、「真夜中」で突然、フォルティシモの不協和音が刻限(12 時)の到来を知らせる。時を刻む打楽器による規則的なリズムのなか、シンデレラは慌ててその場から立ち去る。

「ヴァイオリン協奏曲 第2 番」は1935 年の初演。プロコフィエフ独特の苦みやモダンで鋭いリズムは健在だが、「ヴァイオリン協奏曲 第1 番」の攻撃的で生々しい音楽とはかなり異なる。楽章も同じ3 楽章構成だが、第1 番の「緩ー急ー緩」とは逆に、第2 番では「急ー緩ー急」を採用。冒頭こそモノローグ的な空気で始まるが、ヴァイオリン・ソロはオーケストラと緊密に絡みながら、間断なく歩み続ける。第1 楽章の明快さ、第2 楽章のたおやかな美しさ、フィナーレの快活なコントラストなど、全体的に鮮やかな印象を残す。

プロコフィエフは野性的で複雑な音やリズムを用いる一方、けっして晦渋ではない明晰さも持ち合わせていた。最後の交響曲である「第7 番」に至って、それはいっそう顕著なものとなる。ソ連という国では(おそらく命にもかかわる)芸術活動への干渉もあったことだろう。第6 番までの強烈な表現や自作オペラを題材とした破天荒さを経由して、第1 番「古典交響曲」に回帰したかのような、簡明な作風に到達したのだった。プロコフィエフは自らこの曲を「青春交響曲」と呼んだが、流麗な主題をもつ第1 楽章、第2 楽章のワルツ、歌謡的な第3 楽章のアンダンテを経て、(映画音楽を想わせる)賑やかなヴィヴァーチェのフィナーレを迎える。なお、最初は登場人物が皆去って行くような静かな幕切れになっていたが、初演を担当した指揮者の勧めにより、活発なコーダが加筆された。